「思い起こせ、神の真実」

（哀歌３：19～33）

2018.1.6

元旦礼拝でお話しましたように、今年の聖句をこの哀歌３章22、23節といたしました。「**主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい**」。最新の聖書協会共同訳では、後半のところを、「**あなたの真実は尽きることがない**」と訳しています。

この聖句は、個人的には、私の愛唱聖句の一つであります。自分では忘れていたのですが、私が聖書学院を卒業する日の朝、この聖句を開いたということでした。聖書学院では、毎朝、修養生による早天祈祷会が行われているのですけれども、卒業式の日はいつも卒業生が担当することになっておりまして、私がこの聖句を開いたそうです。数年前に、同級生だった牧師から、「そう言えば、佐藤くん、卒業式の朝、早天でこの聖句を開いたよね」と言われて、「へえ、そうだったんだ」と思い出したことでした。私がこの聖句を愛しているのは、見せかけの慰めや希望ではなく、絶望の中で語られている希望だからこそ、本当の価値があると思うからです。絶望の暗闇の中で、この22、23節は輝いております。

この哀歌というのは、紀元前586年、南王国ユダがバビロニア帝国によって滅ぼされ、都エルサレムが陥落し、神殿をはじめ、何もかもが破壊され、焼き払われてしまった、その惨状を目の前にして、預言者エレミヤが歌った嘆きと哀しみの歌であります。国の指導者たちは捕らえられてバビロンへと連れて行かれ、残った男たちの多くは殺され、女たちは犯され、子どもたちは飢えのために街角で死んでいく。そればかりか、人々は飢えをしのぐために、先に死んだ自分の子どもを煮て食べたと記されています。この世の地獄のような、あまりにも悲惨な光景を目の前にして、エレミヤは呆然とそこに立ち尽くし、涙を流しながら、その惨状をこの歌に伝えています。もはやどこにも希望がなく、20節では「**わが魂は絶えずこれを思って、わがうちにうなだれる**」と言います。あまりにも悲惨な光景を前に言葉を失い、顔を伏せるしかなかった。

そのように、この哀歌全体を暗闇が覆っているような、絶望的な状況が語られる中で、５章あります哀歌の真ん中、３章の中のこの真ん中の一部分だけ、ポッカリと穴があいたように光が差し込んでいます。まるで台風の目の中に入ったかのように、ここだけ明るい青空が広がっています。この部分だけ、絶望の中で突然、希望が語られている。そしてここを通り過ぎますと、再び深い悲しみが語られています。

そのように、絶望から希望へと変わる、その大きな転換点がこの21節の聖句であります。「**しかし、わたしはこの事を心に思い起す。それゆえ、わたしは望みをいだく**」。それまで、目の前に広がる悲しい現実ばかりに目が奪われていたのを、向きを変えて、私たちの神さまがどのようなお方であるのかをもう一度思い起こした。そのとき、「**それゆえ、わたしは望みをいだく**」とエレミヤは立ち上がることが

できた。

この口語訳の「**望みをいだく**」という言葉は、他の訳ではほとんどが「**待ち望む**」と訳しています。口語訳でも、同じ言葉が24、26節で使われていますが、そこでも「**待ち望む**」と訳されています。24節では、「**わが魂は言う、『主はわたしの受くべき分である、それゆえ、わたしは彼を待ち望む』と**」。ここで、「**彼を待ち望む**」と言っているように、エレミヤが「**望みをいだく**」（21）ことが出来たのは、「そのうちよくなるだろう」という根拠のない希望的観測を述べているのではなく、神さまがおられるからこそ望みをいだき、その主を待ち望む、ということです。

24節で、「**それゆえ、わたしは彼を待ち望む**」と言っているように、エレミヤが待ち望むことができる理由として、その前で「**主はわたしの受くべき分である**」と言います。新改訳2017では、「**主こそ、私への割り当てです**」と訳されています。「**受くべき分**」と訳されているヘブル語は、「分け前」とか、「割り当て地」などの意味です。先ほどの交読文の詩篇16篇では、「**主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきもの。あなたはわたしの分け前を守られる**」（5）とありました、その「**嗣業**」と同じ言葉です。

この言葉は、もともとはイスラエルの民が40年にわたる荒野の旅を終えて、ついに約束の地カナンへと入って行ったとき、その与えられた土地を12部族で分割したときに遡る話であります。神さまから12部族がそれぞれ自分たちの土地を与えられた。その割り当て地、嗣業の地、受くべき地を受け取った。ところが、レビ族だけは割り当ての土地が与えられませんでした。なぜならレビ族は、幕屋における礼拝や犠牲をささげる、その奉仕のためだけに仕えて生きるようにと特別に選ばれた部族でした。そのために、自分たちの住む土地、そして犠牲などの動物を飼う土地以外の、いわゆる農地などは与えられませんでした。その代わりに主がレビ族に告げられたのが、「あなたがたには私がいるではないか。私自身が、あなたがたが受けるべき嗣業、割り当ての地である」と言われた。その主の語りかけを受け止めて告白した言葉が、「**主はわたしの嗣業**」という言葉です。自分たちには、最も祝福にあふれた嗣業、主ご自身という嗣業が与えられている。

この哀歌でこれが語られたとき、ユダ王国は滅ぼされて、神の民はもう何もかも失ってしまっていたとき、自分たちのものは何もない、というときでした。そのときエレミヤは、「**主はわたしの受くべき分である**」、「主こそ、私への割り当てです」と言った。たとえ、すべてを失ったとしても、私たちにはなお主が与えられている。どんなことがあっても、契約のゆえに私たちを捨てることがない、絶えることなくいつくしみを注いでくださる、そのような主こそ、私たちが受けるべき嗣業！と言った。

このお方がおられるからこそ、「**わたしは望みをいだく**」「**彼を待ち望む**」と言えた。ですから「**待ち望む**」というのは、じっと我慢する、という態度ではなく、神さまが必ずや御心をなしてくださると信じ、期待して待つ姿勢です。それゆえ、相手に対する信頼がなければ、

待ち望むなどということはとてもできない。相手を信頼しているからこそ、待ち望むという心の姿勢が生まれてまいります。

そして、そのように主に信頼して待ち望む者たちに対して、主はその期待を裏切らないと言う。25節に、「**主はおのれを待ち望む者と、おのれを尋ね求める者にむかって恵みふかい**」。

このような、絶望から希望へと大きな転換を生み出したのが、21節の「**わたしはこの事を心に思い起す**」という姿勢でありました。それまで、悲惨な状況ばかりに目を奪われてうなだれていたところから、心の向きを変え、それまで見つめていたものから目を離し、神ご自身へと目を注いだ。この21節で「**思い起こす**」と訳されているヘブル語は、旧約聖書で何度も繰り返し出てまいります、「シューブ」という言葉、それは「帰る」という意味の言葉です。皆さんもよく知っている聖句では、故人記念礼拝のときによく交読文で読みます詩篇90篇3節、「**あなたは人をちりに帰らせて言われます、『人の子よ、帰れ』と**」。神さまに「**人の子よ、帰れ**」と呼びかけられて、人は死に至るのであるという聖句です。

そして、この「シューブ」というヘブル語が旧約聖書で最も多く使われているのはエレミヤ書です。この哀歌を歌ったエレミヤが預言した言葉が綴られているエレミヤ書には、なんと115回もこの「シューブ」という言葉が使われています。預言者エレミヤは、神に背き続けるイスラエルの民に対して、「神に帰れ」と訴え続けた。3章にはこういう言葉があります。「**主は言われる、背信のイスラエルよ、帰れ。わたしは怒りの顔をあなたがたに向けない、わたしはいつくしみ深い者である。いつまでも怒ることはしないと、主は言われる**」（3：12）。まだ国が滅びる前から、哀歌が歌われる前から、エレミヤはずっと民に向かって「神に帰れ」と語り続けて来ました。

この「**帰る**」という言葉は、神との関わりにおいて使われるとき、それは「向きを変えて神のもとへ帰る」、すなわち「悔い改め」という意味を表します。エレミヤが、哀歌の3章21節で「**わたしはこの事を心に思い起す**」と言ったとき、ただ頭の中で記憶を呼び起こす程度のものではない。これまで預言者として、神の言葉を民に向かって語り続けてきたものの、神の怒りによる審きが下ったとき、そのあまりにも悲惨な惨状を目の前にしたときに、エレミヤ自身が神さまのもとから離れそうになっていたのでありましょう。「ああ、神は私たちをついに見捨てられたのか。契約に基づく神の愛も、ついに絶えてしまったのか」。神の真実がエレミヤにも見えなくなりかけていた。そういう自分に気づいて、エレミヤ自身が、もう一度神のもとへ帰るような思いで、「**わたしはこの事を心に思い起す**」と言った。私はここに帰って来る。

エレミヤだけではありません、私たちも、目の前に起こってくる出来事があまりにも辛く、悲しいときに、主のいつくしみと憐れみの深さを忘れてしまう、信じられなくなってしまうということがある。実際、私たちの身の回りにも、あるいは教会の中にも、主のいつくしみを忘れさせるような、思いがけない出来事、

悲しい出来事が起こってまいります。そういうとき、「主のいつくしみは絶えてしまったのだろうか。私はもう主に捨てられたのではないか」と思ってしまう。エレミヤが「**わが魂は絶えずこれを思って、わがうちにうなだれる**」（20）と言ったように、私たちも、自分が置かれている状況ばかりに心の目が奪われて、主のいつくしみを忘れてしまう。神さまが信じられなくなってしまう。

このときエレミヤは、ハッと我に帰るようにして、「そうではない」と言った。「**主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない**」（22）。新共同訳聖書は「**主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない**」と訳しました。新共同訳が、「**決して**」という言葉を2回使っているのは、原語では「確かに」「本当に」という意味にもなる短い言葉が入っているからです。「主のいつくしみは本当に絶えないのだ。主の憐れみは本当に尽きないのだ」。あまりにも辛くて、もう投げやりになってしまいそうな中で、そこに踏みとどまるようにして、踏ん張るようにして、「そうではない。主のいつくしみと憐れみは本当に尽きることがないのだ」。

なぜそう言えるのか、「**これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい**」（23）。かつては主はいつくしみ深い方であったものの、今はもう、主のいつくしみは絶えてしまった、尽きてしまった、などということはないのだ。主のいつくしみと憐れみは、朝ごとに新しく更新される。それは、神は真実なお方だから。あなたの真実は尽きることはない。契約を結んだ神の民に対して、その契約に基づいて、決して態度を変えることはない。どこまでもまっすぐ、真実を貫いてくださる。

パウロがテモテに宛てた手紙の中では、「**たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである**」（Ⅱテモテ2：13）と出てきます。たとえ私たちが主に対して不真実でも、主イエスは常に真実であり続けられる。これが人間同士のやりとりの場合、相手があまりにも不真実、不誠実な態度を示しましたら、「それならこちらも」と態度を変えるものであります。こういう人に対して、まともに付き合う必要なんてない、と思ったりする。そのために、時と場合によっては、真実から不真実へと変わってしまうことがありうる。けれどもパウロは、「**たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である**」と言いました。たとえ私たちが神に対して不真実、不誠実であったとしても、神さまのほうは、私たちの態度いかんによってその態度を変えて、不真実な対応をされるということはない。神が語られた約束の言葉は、やっぱりやめた、と反故になってしまうことはない。神に背く者に対しても、なおも愛といつくしみを注ぎ続けてくださる。

礼拝で続けて読んでおりますローマ人への手紙の、すでに出てきた3章でも、パウロはこう言っています。「**あらゆる人を偽り者としても、神を真実なものとすべきである**」（4）。どんなことがあっても、「神は真実な方である」という信仰に立ちなさい、とパウロは勧めます。といいますのは、「神は常に真実なお方

である」ということが、私たちの信仰にとっては原点であり、土台だからです。この原点がズレてしまっては、私たちの信仰は成り立ちません。新約聖書が書かれたギリシャ語で「真実」という言葉は、「信仰」という言葉と同じであります。神が信頼に値する真実なお方だからこそ、そのお方を信じる、という信仰がそこに生まれます。ですから、神を信じるというのは、神の真実を信じる、神の真実を信頼する、ということですね。

ですから、私たちの信仰生活というものは、信じる私たちの側の真実さがカギになるのではありません。信仰の確かさは、私たちの信じる力の大きさ、強さにかかっているのではない。自分の真実を信じるのではなく、神の真実を信じる。私の信仰が私を救うのではありません。神の真実が私たちを救ってくださる。ですから信仰というのは、神さまに対して「アーメン」「あなたは真実です」と言うことです。どれほど神は真実なお方か？それは御子キリストを十字架に与えるほどの真実です。これ以上はない。神はどのように私たちに対して真実なのか、「十字架をご覧なさい」と主は言われる。あなたのためにここまでする神は、常に真実なお方。他の者を不真実な者としても、神は真実なお方としなさい。こういう真実なお方だからこそ、私たちは絶望のどん底に沈んでしまうようなときも、なお心の向きを変えて、立ち上がり、神を信じることができる。私たちが、もし「神は真実なお方」と信じることが出来ないとしたら、それは言うならば、「神の真実よりも自分のほうが真実だ」というようなものです。「神の真実なんて当てになりません！」「そう判断する私のほうが確かです」。私たちは神の真実を疑いながら、「あなたより私のほうが確かです。あなたを信用なりません」、そう言ってしまうことがないでしょうか。でも私たちは「神は常に真実」「それでも神は真実」ここに立ちたいと思います。

この絶望から希望への転換は、21節がその転換点であると話しましたが、ある人はそうではなく、その前からその転換が始まっている、と言います。3章17節、18節を読みますと、「**わが魂は平和を失い、わたしは幸福を忘れた。そこでわたしは言った、『わが栄えはうせ去り、わたしが主に望むところのものもうせ去った』と**」。この18節では、「**わたしは言った**」とあります。誰に言ったかというと自分の魂に語っている。この哀歌の中で、3章のこのところに至るまで、エレミヤが「**わたしは言った**」という表現は一つも出てきません－ここが初めてです。自分が自分に対して言う、というあたりから、転換が始まっている。

この「私が私に言う」という表現で思い出すのは、ルカ15章にあります放蕩息子の譬え話であります。あの弟息子は、父親が死んだときにもらうことができる遺産をまだ生きているうちに譲り受け、家を飛び出して行き、すっかり財産を使い果たし、食べることも出来なくなった。そのとき、「**そこで彼は本心に立ちかえって言った**」と出てきます。本心に立ち返って、彼は自分自身に対して、「父の家には食べるものがたくさんあるのに、自分はこんなところで飢え死にしそうになっている。そうだ、父の家に帰ろう。そして、父に対して、『父よ、

わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました』と言おう」。その言葉のとおり、彼は自分が勝手に飛び出してきた父の家に帰っていきます。

その父の家に帰るという方向転換、悔い改めが起こったのは、彼が自分の父の家のこと、あの家で今も変わらずに自分の帰りを待ってくれている父を思い出したときであります。家を飛び出したとき、もう心の中では、自分の父親を殺してしまった。殺さなければ遺産を受け取るなんて出来ません。父を殺し、父の家をも心の中で葬り去ってしまっていました。自分に絶望したとき、もう一度、父のことを思い起こした。本当に自分勝手であります。自分の都合しか考えないような、自己中心極まりない態度であります。ところが、その彼が向きを変えて帰って行ったとき、まだ家にたどり着く前に、父のほうからあわれに思って走り寄り、喜んで彼を迎え入れてくれる、という大きな回復がそこに起こりました。自分を捨てたような息子をあわれに思って走り寄る父親。あの譬え話は、主のいつくしみとあわれみは絶えないことを物語っています。

放蕩息子だけではありません、私たちが自分自身に語りかけ、主ご自身がいかなる方であるかを思い起こすとき、そこに神のもとへと帰るという、驚くべき回復のわざがそこから始まります。「そうだ、私の神はこういうお方だったではないか」。そして私たちが日々の生活の中で、そのように自分に語りかけ、神を思い起こすとき、もうすでにそこに私たちに対する神の働き、神のわざが始まっている。私が信仰を働かせて神を思い起こしたのでなく、神が私たちの心の中に働きかけて、主ご自身を思い起こしてくださる。主のいつくしみとあわれみが絶えないこと、神が真実なお方であることを、神さまが思い起こさせてくださる。私が私に語るよりも前に、神が私たちの心に語りかけていてくださる。「あなたは忘れているのか？主はいかなるお方であるかということを」「思い起こせ、神の真実を！」と語ってくださる。「あなたはもう、何度も繰り返し聴いてきたではないか。『**主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない**』ということを」。だからこそ、あなたは今、もう一度神のもとへと帰ることができる、と告げてくださる。私たちが悲しみに沈むときも、その心の中に神さまがいつも語りかけておられるのではないでしょうか。それはまさに、「主のいつくしみは絶えない！神の真実は尽きない！」ということです。

その意味では、待っているのはいつも主ご自身のほうではないでしょうか。私たちが「**待ち望む**」というよりも前に、神さまのほうがずっと私たちの帰りを待っておられる。こんな私たちに期待をして待っていてくださる。あの放蕩息子の父親が、息子の帰りをひたすら待ち続けたように、父なる神さまは、私たちが主のいつくしみを思い起こし、向きを変え、神のもとへ帰るのを待っておられます。

だからこそ、私たちは何度でも、どんなところへ落ちてしまっても、そこから向きを変えて、神のもとへと帰ることができる。エレミヤはこの章の後半で、敗れ果てた神の民に呼びかけています。40節で、「**われわれは、自分**

の行いを調べ、かつ省みて、主に帰ろう」。あなたがたが帰るべきところは、真実な神のもと以外にはないではないか、さあ、共に神のもとへ帰ろうではないか。そして、哀歌の最後では、神の民を代表するようにして神に向かって語ります。5章21節、「**主よ、あなたに帰らせてください、われわれは帰ります。われわれの日を新たにして、いにしえの日のようにしてください。**」（5：21）。「**あなたに帰らせてください、われわれは帰ります。**」

この毎週の礼拝は、私たちが週の初め、神のもとへと帰って来るときです。礼拝において、真実なる神が私たちが帰ってくるのを待っておられる。「さあ、帰って来なさい」と、私たちを招き続けてくださる。だからこそ、週の始め、向きを変え、神のもとへ帰ることができます。その絶えざる主の招きに応えて、この年も、「あなたこそ私の主」と告白する真実な礼拝をささげ続けたいと心から願います。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。

神さまがどんなときにも真実なお方であること、どうぞ私たちがそこに、立ち続けさせてくださいますようにお願いをいたします。自分の真実を当てにするのではありません。御子キリストを与えてくださった神に「あなたこそ真実、アーメン」と応答していく歩みを、この一年もさせてくださいますようにお願いいたします。朝ごとに新しく注がれる主の慈しみと憐れみに生かされて、この年を歩ませてくださいますことをお願いいたします。私たちのそれぞれの歩み、家庭の中に主の祝福をお与えください。まだ救われていない家族の中に、どうぞあなたの救いのみわざを成してくださいますようにお願いいたします。

新会堂と願いつつ歩みを続けておりますが、一つ一つの事柄の中に神さまが生きて働き、最善へと導きを与え続けてくださいますようにお願いいたします。

病気や弱さを覚えておられる方々、あなたが強め励ましを与えてください。

受験生の方々の中にも届いてくださって、心も身体もお守りくださり、受験に元気に向かうことが出来るように助けを与えてくださることをお願いいたします。

東北教区の五つの教会一弘前、三沢、築館、仙台、福島、この新しい年の歩みをお支えくださいますようにお願いいたします。

私たちの教会の献身者であります千葉和幸先生の上に、また、ご家族の上に、岬教会の上に主の祝福と支えがありますようにお願いをいたします。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師　佐藤信人）